

# 英文法準教科書・参考書をよりよいものにするために(1)

## —音声面の記述について—

萩原 一郎

### 1. はじめに

現在、英語教育界では「実践的コミュニケーション能力」が完全にキーワードになった感がある。しかし一方、現在でも生徒に英文法の準教科書や参考書をもたせて、英文法の指導を独立して行っている高校も多い。また、最近「コミュニケーションのための英文法」という言葉もよく聞かれ、書店では一般人向けの各種英文法書が何種類も並んでいる。

ところが、高校現場では、英語を聞く、話す指導はオーラル・コミュニケーションの授業にまかされ、総合英語である英語Ⅰ、Ⅱの授業では音声指導が片隅に押しやられている感がある。ましてや、文法の授業となると、音声に関する扱いは微々たるもので、文法事項の解説と問題演習という昔ながらの教授方法が多用されているのではないだろうか。現在出版されている英文法書には会話表現などが多く取り入れられるようになったが、音声面での記述はお粗末といわざるをえない。英文法の準教科書や参考書の音声面の記述が「選択疑問文」「付加疑問文」のイントネーションに始まり、わずかだけというのは、何とも情けない話である。まずは、文法書の中に音声に関する記述をどんどん増やすことで、音声を伴った文法指導が全国の教室で行われるようになれば、文法とコミュニケーションが結びつく第一歩となるであろう。さらに、付属のCDを使ったリスニング練習、音読練習が授業に取り入れられれば、総合的な英語力を身につけることが期待される。本稿では、英文法書に取り入れるべき音声ルールを各種の音声学書から抜き出し、それを高校生にわかりやすい形で提示する方法をいくつか紹介したい。

### 2. どのような視点の音声に関する記述を

#### 取り入れるか

さまざまな音声学書の記述を整理し、以下のような諸点を英文法書に取り入れることを提案する。

#### (1) 強勢のパターン

- ・動詞＋副詞(write down)
- ・助動詞＋動詞(must go)
- ・動詞＋代名詞＋副詞(write it down)
- ・名詞＋名詞(cat food)
- ・形容詞＋名詞(fresh leaves)
- ・前置詞＋冠詞＋名詞(on the table)
- ・～ing＋名詞(living word, drinking water)

#### (2) 弱形と強形

- ・完了形の発音(have, has, hadを弱く発音)
- ・現在[過去]完了進行形(has been asking)
- ・助動詞＋have＋過去分詞(must have seen)
- ・仮定法のwould, have(would have heard)
- ・some, can, and

#### (3) イントネーション、音調

- ・疑問文、感嘆文、付加疑問文
- ・3つ以上のものを並列する場合
- ・主節と従属節
- ・関係詞の継続用法
- ・挿入句
- ・同格
- ・直接話法において、she said(asked)などが後置される場合("Have you ever been to Okinawa?" she asked.)

#### (4) 会話体における縮約形

- ・We'd better...
- ・She's lived...
- ・I'll be studying hard...
- ・How's your mother...

#### (5) 区切り

- ・接続詞の前で区切って読む(It is certain / that...)
- ・長い主語のあとで区切って読む(The visas Sugihara issued / saved more than six thousand people.)

- ・ 同格を表す語句のあとで区切って読む  
(One hunter, William Cody, / had a record of killing 69 buffaloes a day.)

#### (6) 音の連結

- ・ 動詞 + a [an] (heard a voice)
- ・ 動詞 + it (find it)
- ・ 子音 + 母音 (get up)
- ・ assimilation (did you, miss you)
- ・ 文中の his, him, her — [h] が脱落し、音が連結する (put his bag)
- ・ 音の消失 (night train)

例えば、Bob must have arrived in Nara by now. という英文を教えるときに、どうしても「助動詞 + 完了形」という形に注意を払うために、音読をしても [must have arrived] という 1 語 1 語ははっきり発音するもたつた言い方になりがちである。これを have が弱形になり、[h] の音が脱落して直前の must とつながって、1 語のように発音する [mustavarrived]、という趣旨の記述を載せる。教室では、これをスムーズに言えるところまで練習しなければ、リスニングに使え、話して通じる「生きた」文法事項には決してならない。

また、had better は使い方にかかなりの注意を要する言い方であるが、せめて I think we'd better... というような縮約形を使った例文だけでも教科書に示してもらえると、教室でコメントがしやすい。

some と any の使い方の記述(肯定文では some, 否定文・疑問文では any など)自体にも大きな問題があるのだが、some の弱形、肯定文での any にふつう強勢が置かれる旨の記述もほとんど見られない。

関係詞の継続用法(非制限用法)の例文というと、

- ・ He has two daughters who are teachers.
- ・ He has two daughters, who are teachers.

に類似した英文が対比されて示されることがほとんど(この例文の不適切さに関してはここでは触れない)だが、この2つの英文のイントネーションの違いに触れているものなどほとんど存在しないのである。従って、教室ではほとんど音声指導の対象にならず、娘が2人なのか、3人以上なのかという生徒を煙にまいたような解釈論で終わってしまう。

### 3. 音声面に関する記述の実例

#### (1) 参考書での記述

参考書にはスペースが十分にあるので、高校生が自学自習する際に理解できるようにコラム的に詳しく解説を書き込むのがよい。さらに付属のCDを聞いて実際の音声を確認できるようにするべきであろう。上に挙げた点のすべてをここで網羅することはできないので、高校生にわかりやすい形での説明の例をいくつか挙げる。

#### ● 仮定法

仮定法の動詞の形はかなり複雑なため、仮定法を使った英文をなめらかに言うことは難しいものです。特に主節の動詞の部分に would, could などが入り面倒ですね。でも、こうした英文を言うときには縮約形が使われるのです。might には縮約形はありませんが、would, could, should は前の語と結びついて 'd となります。

- ・ If I were a bird, I could fly to you.  
→ I'd

仮定法過去完了では、'd に加えてそれ自体あまり重要な意味をもたない had, have が弱まり、[h] の音が脱落し、前の音と一緒にになってしまいます。

- ・ If she had loved me then,  
→ she'd  
she would have accepted my present.  
→ she'd have → she'dave

こうしたルールをふまえて、何回も声に出して読んでみてください。こうしたことを知らないと、リスニングで対処できませんね。

#### ● <修飾語(形容詞など)+名詞>のいろいろな形

名詞の前に修飾語(1語)を置くパターンは、<形容詞+名詞>だけではなく、例えば <名詞+名詞>のように、前の名詞が形容詞の働きをして後ろの名詞を修飾するという形もあります。

- fresh milk (新鮮な牛乳) <形容詞+名詞>
- frozen yogurt (フローズンヨーグルト)  
<過去分詞+名詞>

*boiling water* (熱湯) 《現在分詞+名詞》

*stone bridge* (石橋) 《名詞+名詞》

*washing machine* (洗濯機)  
《動名詞+名詞》

*five-year-old girl* (5歳の女の子)

この修飾パターンでは、名詞の前にくる語の働きによって、アクセントの位置が違ってくることに注意しましょう。

**弱** のパターン

*fresh milk* 《形容詞+名詞》

*frozen yogurt* 《過去分詞+名詞》

*boiling water* 《現在分詞+名詞》

**強** のパターン

*stone bridge* 《名詞+名詞》

*washing machine* 《動名詞+名詞》

### ●副詞節のイントネーション

従属節が文頭に来る場合、主節の前で軽く上げて発音するのがふつうです。

- ・ Since this is a secret, (一) don't tell anybody about it.
- ・ As far as I know, (一) he hasn't started on the job.

一方、主節が文頭に来る場合、下降調で言うのがふつうです。

- ・ He is loved by everyone because he is honest and kind.

\*文頭に来る副詞、副詞句(分詞構文)も同じイントネーションのパターンをとることが多いので、しかるべき時にまとめて指導するとよい。

- ・ Fortunately (一) he was able to get a concert ticket.
- ・ Feeling cold, (一) he put on his coat.

### ●部分否定のイントネーション

部分否定の英文を言うとき、どのような音調で言えばいいのでしょうか。

- ・ Not everybody in the class has read his work.

上の例のように、部分否定の英文では、いっ

たん下げてそして上げるという「下降上昇調」のイントネーションを使うことで、「全員が読んでいるわけではないんだ」というニュアンスを伝えるのがふつうです。

部分否定を not all, not necessarily, not always, not both などの文字で理解できたら、音調も意識してみるといいでしょう。

- ・ The museum is not always crowded on Sundays.

### ●助動詞

この課でポイントになっている助動詞。ついつい強く読んでしまいがちですが、「助動詞+動詞の原形」の形では助動詞を弱く、動詞の原形を強く読みます。助動詞は特に強調する場を除いては、「弱形」を使って読みます。

- ・ Bill can speak Japanese fluently.  
[kæn, kn]
- ・ I must go to the dentist tomorrow  
[məs, ms] afternoon.
- ・ We should do our best in everything.  
[ʃəd]

canは[kæn]と強く読んでしまうと、can'tと間違えられることがよくあり、肯定が否定と受け取られてしまいます。また、mustやshouldは最後の子音を発音せずに弱く言うと自然になります。

### ●会話で「挿入」を表現するためには？

「挿入」を使った英文を声に出して言う場合は、原則として、「挿入」された部分の末尾を少し上げて言い、その後に少しポーズを置けばいいでしょう。これで相手に「挿入」であることが伝わります。

- ・ Too much reading, I think, (一) / is bad for your eyes. (読書のしすぎは、私は思うのだが、目のためによくない)

### (2) 準教科書での記述

スペースに制約のある英文法準教科書では、せめて赤、青など色を決めて、イントネーションを示し

たり、強勢の記号を入れたり、「連音」を簡潔に示すことなどが望まれる。実際に準教科書に少しでも記述があれば、現場の先生方が教室で指導する可能性が増えることが期待できるからである。さらに、それぞれの音声項目をポイントにしたリスニングの問題を準教科書に取り入れることも必要であろう。そこで、準教科書の右ページにある練習問題の最初か最後に音声に関する問題を掲載することを提案する。もちろん、そのページで扱った文法項目で取り上げるべき音声のポイントがない場合は無理に取り上げる必要はない。本稿では便宜上、各設問に様々な文法項目が混在するように作成してある。

#### ●音声変化をリスニングでチェックする

CDを聞いて( )に適切な語を入れてみよう。

- ・( What ) ( a ) lovely day it is!
- ・I ( should ) ( have ) ( studied ) harder last night.
- ・I ( expect ) ( him ) to win the game.
- ・I ( found ) ( it ) ( difficult ) to talk to her.

#### ●区切りと弱形に注意しながら音読する

／で区切りながら音読してみよう。

- ・It is said / that she is the most popular singer in the U.S.
- ・It is very kind of you / to lend me your bicycle.
- ・The book I read yesterday / was very interesting.

#### ●縮約形をリスニングでチェックする

CDを聞いて( )に適切な語を入れてみよう。

- ・( There's ) a letter on the table.
- ・( I'll ) ( be ) free tomorrow afternoon.
- ・( He's ) ( been ) absent from school for three days.
- ・( He'd ) often come to see me when he was a child.

#### ●区切りと弱形に注意しながら音読する

／で区切り、thatを弱く発音しながら音読してみよう。

- ・It is certain / that he will be elected mayor.
- ・The trouble is / that I have damaged his DVD player.
- ・We must not forget the fact / that all people are equal.

#### ●「他動詞＋副詞」の群動詞をリスニングでチェックする

CDを聞いて( )に適切な語を入れてみよう。

- ・( Turn ) ( off ) the radio.
- ・( Turn ) ( it ) ( off ).
- ・( Put ) ( her ) ( on ), will you?
- ・Please ( check ) ( it ) ( out ).

#### 4. まとめ

現在、英語Ⅰ、Ⅱ、英語リーディングの授業では教科書付属のCDを教室で聞かせることがよく行われている。さらに、従来あまり音声的な指導が行われていなかった英語ライティングの授業でもCDが使用されることが私の周りでは増えている。本稿で提言してきたように、それが英文法の準教科書を使った授業にまで広がり、CDを使った授業が全国の高校で行われるようになれば、文法教育の姿もかなり変わったものになるはずである。英文法の授業を文法問題を解くための授業だけにせず、英語を聞き、話すための基礎づくりをする時間にも変えていくこと、これこそが英語を使えるようになる生徒を増やす近道だと信じている。

#### 参考文献

- 石原明 (1991) 『基礎から学ぶ英語のイントネーション』 ジャパンタイムズ。  
 小寺茂明 監修 (2005) 『デュアルスコープ総合英語』 数研出版。  
 竹林滋 (1996) 『英語音声学』 研究社。